

<寄稿論文>筑波小中高大連携社会科授業研究会の歩み：小中高大で連携する意義と課題

著者	梅澤 真一
雑誌名	筑波教育学研究
巻	18
ページ	27-47
発行年	2020-06-01
URL	http://doi.org/10.15068/00161714

寄稿論文

筑波小中高大連携社会科授業研究会の歩み —小中高大で連携する意義と課題—

梅 澤 真 一※

History on Social Studies Lesson Study Group based on Cooperation of
elementary school, Junior High School, High School and University:
Significance and Challenge on Cooperation of elementary school,
Junior High School, High School and University

Shinichi UMEZAWA

本稿では、東京都文京区に位置する3つの筑波大学附属学校（附属小学校、附属中学校、附属高等学校）と筑波大学が連携することで発展してきた「筑波小中高大連携社会科授業研究会」に注目し、その歴史と具体的な取り組みに触れながら、今後の小中高大が連携して授業づくりを進めるにあたっての意義と課題を明らかにする。

I. 目的

本稿では、「筑波小中高大連携社会科授業研究会」の発足から現在までの取り組みの様子を紹介することを通して、筑波大学に属する小学校、中学校、高等学校、大学の教員が共同研究体制を構築するにあたっての留意点を明確にすることを目的とする。

II. 内容

内容としては、2012年7月実施のプレ大会から、2020年1月18日第6回大会までの大会の様子を報告する。各大会の内容だけでなく、次会に向けての改善点も示した。

最後に、発足から現在までの経緯を振り返って、筑波大学に属する小学校、中

※筑波大学附属小学校

学校、高等学校、大学教員の授業実践をもとに語り合うシステムの構築が、個々人の研究内容の深まりを育むことにつながるとともに、全国にその研究成果を広めることに貢献する点を強調する。

Ⅲ．「筑波小中高大連携社会科授業研究会」の取り組み

1．筑波小中高大連携社会科授業研究会発足の経緯

筑波大学には11校の附属学校がある。そのうち筑波大学附属小学校、筑波大学附属中学校、筑波大学附属高等学校3校は、文京区大塚に立地している。中学校と高等学校は同じ敷地に立地し、小学校からも徒歩10分程度の距離にあるため、社会科を担当する教員の交流は長い歴史を持つ。

大塚地区の学校が連携して社会科教育研究に取り組むようになったのは、筑波大学教育局が中心になり、四校研究会を発足させたからである。四校研究会の四校とは、筑波大学と文京区大塚地区にある小、中、高の3附属を示している。この研究会は、社会科に限らず全教科で実施している。この研究会の発足の経緯や成果の詳細は省くが、この四校研究会が設定されているため、年に3回、小・中・高の教員は顔を合わせる。

四校研での主な課題は「小・中・高一貫カリキュラム開発」であり、授業研究を通して研究協議を重ね、その成果として教科・領域毎にカリキュラム試案をまとめ、冊子にしている。

例えば、小中高一貫教育の特色あるカリキュラム（社会科・地理歴史科・公民科）では、【一貫した指導理念】として、下記の4点を掲げ、小中高カリキュラム作成の視点を明確にしている。また、内容を地理、歴史、公民で整理している。理念と、小学校の一例を示す。

- I 自主的、主体的に学習に取り組む態度を育てる教育
- II 児童、生徒同士が学び合う場面をもうけて、協同的な学習を促す教育
- III 文章を読んだり書いたりする機会、調べたことや自分の考えをまとめて発表する機会などを設けて、表現力・思考力の育成をはかる教育
- IV 学ぶ楽しみを大切に、意欲的に学習する姿勢を育てる教育

小中高一貫教育の特色あるカリキュラム 社会科 地理歴史科・公民科)			
【貫いた指導理念】			
	I 自主的、主体的に学習に取り組む態度を育てる教育		
	II 児童、生徒同士が学び合う場面をもち、協同的な学習を促す教育		
	III 文章を読んだり書いたりする機会、調べたことや自分の考えをまとめて発表する機会など創設して、表現力・思考力の育成をはかる教育		
	IV 学ぶ楽しみを大切に、意欲的に学習する姿勢を育てる教育		
	地理 地理的な内容)	歴史 歴史的な内容)	公民 現代社会にかかわる内容)
小学校 中学校 年	○ 見つめよう わたしたちのまち」 学校の回りを探検し、絵地図にまとめる。→Ⅰ、Ⅳ 学校のまわりを探検して、探検して分かったことを絵地図に表し、伝え合う。また、自分が作った記号を使って分かりやすい地図をつくり、発表し合う。→Ⅱ ○ 泳はどこから」 学校で水が出る場所がいっぱいあるか調べ、地図に表し、どんなところが多いか話し合う。また、給食室、家庭科室、理科室が水を多く使う理由を話し合う。→Ⅱ ○ 見直そうわたしたちのくら」 スーパーマーケットを見学して仕事に携わっている人々の工夫を調べ、→Ⅰ、Ⅳ	○ きょう土に伝わるねがい」 玉川上水や博物館を見学し、どのように難しい工事を完成させたのか調べ、→Ⅱ ○ ぶらりかかってみよう 人々のくらしの変化」 昔の道具や文化財や建造物について調べ、昔の人々の願いを新聞に表し、話し合う。→Ⅲ	○ じみの地理と利用」 清掃工場の見学して、家庭から出るごみはどのように処理されているかを調べ、→Ⅰ、Ⅳ 最近、ごみがへってきている理由を調べ、ごみを出すルールを考え、話し合う。→Ⅲ ○ 見直そうわたしたちのくらし」 買い物をする時は、どのようなことか気を付けて、品物を選べようか考え、発表し合う。→Ⅲ ○ 泳はどこから」 水の消費量や輸入量の増加などの課題をたえ、節水について自分ができることを考え、話し合う。→Ⅲ
	小学校 高等学校 年	○ わたしたちのくらしと食生活」 夕飯はどのように生産されたものを使っているか、地図にまとめる。→Ⅰ、Ⅳ ○ 自動車のまちに仕事する人々」 何となく自動車が日本に望ましいか、プランを紙面に描きまとめる。→Ⅰ、Ⅳ ○ 日本の環境を守ろう」 日本の自然世界遺産である白神山地、知床、屋久島、小笠原諸島のどれか一つを選び、自然遺産パンフレットを作る。→Ⅰ、Ⅳ ○ 日々の暮らしと情報産業」 学校の様子を紹介するホームページを作って、何を載せたらいいか、何を載せるべきでないか話し合う。→Ⅱ ○ 秋産業に仕事する人々」 大陸棚や海流の流れ、おもな漁港、漁場の位置をめぐり大きな地図にまとめて日本漁業マップを作る。→Ⅱ ○ 秋作りに仕事する人々」 コメの輸入自由化について賛成か反対か話し合う。→Ⅲ ○ 自然条件を生かしたくらし」 北海道と沖縄どちらに住みたいか根拠となる事実を示して話し合う。→Ⅲ	○ 巨内丸山遺跡と吉野ヶ里遺跡の違いを調べよう」 石器、土器を実際に触りながら、当時の生活を想像したり、曲玉を削ったりする体験的学習を行う。→Ⅰ、Ⅳ ○ 取捨選択の邪馬台国を探そう」 お宝と話し合いながら、魏志倭人伝の原文と地図を頼りに、邪馬台国九州説と近畿説の根拠を調べ、→Ⅱ ○ 奈良の大仏の大きさを知らよう」 グループで力を合わせて、新聞紙や模造紙を使って、奈良の大仏の顔や手のひらの大きさを測って作る。→Ⅱ ○ 室町時代の文化を体験しよう」 富舟の水墨画を模写したり、茶の湯や生け花の体験する学習を取り入れ、能と狂言の鑑賞教室に参加したりする。→Ⅰ、Ⅳ ○ 江戸時代の町人文化と新しい学習」 江戸東京博物館に行って、浮世絵、歌舞伎、特産物と交通の発達などについて調べたり、伝統的文化財のへ保存と継承に関わっている人々のインタビューをする。→Ⅰ、Ⅳ ○ 伝統的を考へよう」 アジアの民主化を見学する西郷隆盛VS顔力充実を目指す大久保利通、どちらの方向性になるか？二つの立場に分かれて討論し、考えをまとめる。→Ⅱ ○ 全単元を通して、F-人調べノートに、調べたこと、考えたこと、感じたことなどを綴りながら、表現の仕方や考え方を身につけていく。→Ⅲ

2. 四校研究会社会科部の課題意識

上述のように、カリキュラムを作成し、一つの成果を得たが、そのカリキュラムが広く使われ授業改善のために効果的に活用されるのか不安な点もあった。さらに、カリキュラムを作成するにあたり、小中高の教員がお互いに授業を見合うことによる相互理解の必要性に気づいた。他の学校の社会科授業はどのように展開されているのか、実際に行われている授業を参観したいという問題意識に変わっていった。

筑波大学附属小学校では、授業研究会が盛んで、学校主催の公開研究会6月公開研修会2月の他に、多くの授業研究会を開催している。教科部会でも、学年でも、個人でも授業研究会を設定している。例えば、筆者の場合、社会科部会では、

「初等社会科授業研究会」、学年では「きらきらかにここ授業研究会」、個人では「価値判断力・意思決定力を育成する社会授業研究会」がある。たまに、他の研究会に招かれて授業をすることもある。筑波大学附属小学校では、授業研究、LESSNSTUDYが多く行われている。

一方、中学校や高等学校は実践報告会はなされているが、お互いに授業を見合う授業研究会は、少ないようである。教材開発や教材内容の吟味に力を割き、指導方法には二の次になる傾向が見られるというのは、筆者の偏見だろうか。中学校や高校には部活があり、土日に生徒を授業に招くことが難しい事情もあるのかもしれないが、授業を見合う機会は小学校に比べると少ない。

そこで、小学校社会科部で行っている「初等社会科授業研究会」に中学、高校の先生を提案者として依頼し、研究会に参加いただいた。

3. 筑波小中高大連携社会科創設期の研究会

(1) 第11回初等社会科授業研究会【筑波小中高大連携社会科授業研究会試行大会】

初等社会科授業研究会に中学校の先生を招いた初めての会は、2012年7月26日（木）に筑波大学附属小学校講堂を会場に開催した「第11回初等社会科授業研究会」である。研究会はその時々ニーズに合わせて、テーマを決めているが、この会は、「小中を見通した社会科の授業づくり」をテーマとして掲げた。小学校6年生の児童に、担任である小学校教員（都留覚）と附属中学校教員（関谷文宏）が戦国時代の授業を行った。

○授業提案Ⅰ「織田信長と安土城」筑波大学附属小学校6年生児童

授業者 都留 覚（筑波大学附属小学校）

○授業提案Ⅱ「戦国時代とは」筑波大学附属小学校6年生児童

授業者 関谷 文宏（筑波大学附属中学校）

同じ6年生児童に授業者が2名続けて授業を行った。中学校の関谷の授業は小学生と中学生の実態を認識するためのものだったが、それは関谷にとって小学生を対象にした初めての授業であった。参観した小学校の教員の感想は、小学校の先生のほうが児童の実態に合わせて授業を行なっているため、今回の中学校の先生による授業には価値は見いだせないというものであった。附属中学校の関谷は授業力があり優秀な実践家ではあるが、小学校の授業研究会に参加する小学校教

員の目からみると、実態に合った指導という点で少し物足りない感じがしたようである。

(2) 第13回初等社会科授業研究会【筑波小中高大連携社会科授業研究会プレ大会】

1年6ヵ月後の2014年1月11日(土)、筑波大学附属小学校講堂を会場に実施した「第13回初等社会科授業研究会」では、前回の反省を生かし、小学校の授業は小学校教員が行うこととした。また、テーマを「小・中・高の社会科の授業の連携の可能性を探る」とし、中学校だけでなく、高等学校の教員にも参加を依頼し、小学校の授業を参観しての意見を述べてもらった。また、学習する内容も、「水俣病」に絞り、「水俣病」を小中高でどのように扱うのか、中学校の関谷や高校の福元に実践報告を依頼した。また、「小・中・高の社会科学習の連携の可能性を探る—10年間の社会科でどんな子どもを育てるのか—」パネルディスカッションを設定し、小中高の先生の意見交換の場を設定した。さらに、指定討論者として筑波大学の唐木先生にご指導を依頼した。

研究会の日程内容の詳細は次のとおりである。

○5年生授業展開 「環境を守る—水俣が語りかけるもの—」

授業者 由井 蘭 健 (筑波大学附属小学校)

授業後の話し合い

○中学校の実践報告 報告者 関谷 文宏 (筑波大学附属中学校)

質疑応答・意見交換

○高等学校の実践報告 報告者 福元 千鶴 (筑波大学附属高等学校)

質疑応答・意見交換

○パネルディスカッション

「小・中・高の社会科学習の連携の可能性を探る—10年間の社会科でどんな子どもを育てるのか—」

コーディネータ 梅澤 真一 (筑波大学附属小学校)

指定討論者 唐木 清志 (筑波大学)

パネラー 都留 覚 (筑波大学附属小学校)

升野 伸子 (筑波大学附属中学校)

大庭 大輝 (筑波大学附属高等学校)

この研究会では、小学生の授業は小学校の教員が行うことにした。また、中学

校、高校の教員に自身の学校で行った実践報告をした。実践報告については、小中高の連携を考える必要から、小学校の授業に合わせ、「水俣病」をどのように生徒に教えているのかに関する実践報告を依頼した。同じ社会的事象を、異なる校種である小・中・高でどのように扱うのが明確になった。

今後、小中高の連携をテーマに研究会を組織していくために、「小・中・高の社会科学習の連携の可能性を探る」というテーマで小中高の教員が自由に語るパネルディスカッションを設けた。初等社会科授業研究会は実践者による研究会として、これまで、大学の先生を招いたことはなかったが、連携研究を考えるにあたっては、実践だけでは語れないことも多く、最先端の研究の動向を知る必要があるため、大学の先生に指定討論者を依頼した。授業の指導方法に関する議論は大切だが、今後、社会科教育は何を目指していくのかというビジョンを語ることも大切で、その方向性が共有されることなくして、小中高の連携はできないと考えたからである。

第13回初等社会科授業研究会であったが、小中高大の教員が揃った会となったので、この大会を筑波小中高大連携社会科授業研究会ブレ大会と名付けた。連携を意識して始めた2回目の研究会である。

(3) 第15回初等社会科授業研究会【筑波小中高大連携社会科授業研究会創設大会】

3回目の小中高大の連携研究会は、2015年1月10日（土）に筑波大学附属小学校講堂を会場に開催した。筑波小中高大連携研究も3回目になってきたので、名称を筑波小中高大連携社会科授業研究会創設大会として、第15回初等社会科教育研究会と共催の形で実施した。

大会テーマを「小・中・高の社会科教育の一貫性を考えるー地理的なものの見方考え方を中心にー」とし、地理的内容を中心にした授業提案と実践提案を行った。

前回の研究会では「水俣病」をどのようにとらえるかをテーマとしたが、テーマを具体的にすると、違いはよくわかるが、他の單元への応用は見えにくくなる。そこで、2015年話題になっていた「社会的な見方考え方」をテーマに掲げた。その中でも、地理的見方や考え方に焦点化し、研究会を実施した。具体的には小学校の授業提案と中学校、高等学校の地理的見方考え方を育む実践報告、筑波大学井田仁康先生の講演である。

具体的には、次の日程内容で研究会を実施した。

○3年生授業展開 「地域の違いを考える」

授業者 梅澤真一（筑波大学附属小学校）

○実践報告 中学校で地理的なものの見方考え方をどのように育てているか

報告者 山口泰宏（筑波大学附属中学校）

○実践報告 高等学校で地理的なものの見方考え方をどのように育てているか

報告者 中村光貴（筑波大学附属高等学校）

○講演 「小中高で育てたい地理的なものの見方考え方」

講演者 井田 仁康（筑波大学）

授業提案では、小学校3年生が地域にある駐車場に着目し、その分布と駐車料金から地域の特色を理解しようとする授業提案を行った。また、地理的な見方考え方が中学校、高等学校でどのように育まれるのかについての実践報告があり、地理的なものの見方考え方とは何か、授業実践を通して具体的に考えることができた。大学教員の解説を加えることで、実践と最新の理論の両方を学べる研究会となった。

4. 筑波小中高大連携社会科独立期の研究会の様子

(1)【第2回筑波小中高大連携社会科授業研究会】

4回目の小中高大の連携研究会は、2016年1月10日（土）に筑波大学附属小学校講堂を会場に開催した。初等社会授業研究会から切り離れた、初めての大会である。

テーマは、創設大会が「社会的な見方考え方」のうち、「地理的な見方考え方」に絞ったこともあり、第2回は「公民的な見方考え方」を扱うことにした。

小学校教員であれば、社会科において「地理的」「歴史的」「公民的」な見方考え方それぞれを扱う、総称して「社会的な見方考え方」となるので、どの分野でも対応できるが、中学校、高等学校においては教員の専門内容が分化しており、「地理的な見方」だけでは、歴史や公民を専門とする教員が本研究会に関わりにくくなってしまう懸念があった。小中高が継続的に連携研究を進めるには、どの分野の専門であっても参加できるような体制を作る必要がある。大学の教員に対しても同様で、地理教育、歴史教育、公民教育などそれぞれの専門性に長けた大学教員にも小中高大連携社会授業研究会に関わっていただくためには、研究内容を固定化することは避けたいと考えた。独立期の研究会では、研究の提案運営に多く

の教員が気持ちよく関われる体制を築くことが大切になる。

テーマを「公民的なものの見方考え方の系統性を考える—小学校・中学校・高等学校の実践をもとに一」と設定した。

具体的な内容は、次の通りである。

○提案授業 「救急車は誰のものか」 筑波大学附属小学校 4 年生児童

授業者 梅澤真一（筑波大学附属小学校）

○授業後の話し合い

○中学校の実践報告

「公民的なものの見方や考え方をそだてる中学校の授業」

報告者 升野 伸子（筑波大学附属中学校）

○高等学校の実践報告

「公民的なものの見方や考え方をそだてる高等学校の授業」

報告者 熊田 亘（筑波大学附属高等学校）

○講演 「公民的なものの見方考え方をどのように育てるか」

講演者 江口勇治（筑波大学）

授業提案では、4 年生を対象に、「軽症者の利用急増で重傷者を救うことが難しくなっている救急車の利用状況を踏まえ、救急車の有料化の是非について話し合う」授業を実施した。中学校や高等学校の公民の授業報告と江口先生の講演を聴きながら、公民的なものの見方考え方の系統性を考える会とした。

(2)【第 3 回筑波小中高大連携社会科授業研究会】

第 3 回筑波小中高大連携社会科授業研究会は、2017 年 1 月 14 日（土）に筑波大学附属中学校・高等学校桐蔭会館を会場に開催した。初めて附属中学校・高等学校の桐蔭会館で実施した大会である。

テーマは、創設大会の「地理的な見方考え方」、第 2 回大会の「公民的な見方考え方」に続き、「歴史的な見方考え方」とした。

テーマや具体的な内容は次の通りである。

テーマ

「小・中・高の社会科教育の一貫性を考える—歴史的な見方・考え方を中心に一」
内容

○提案授業「郷土の発展につくす～東京のまちづくり、いまむかし～」

筑波大学附属小学校 4 年生児童

授業者 粕谷昌良（筑波大学附属小学校）

○提案授業 「中世における村の自治と裁判」

筑波大学附属中学校 1 年生生徒

授業者 関谷 文宏（筑波大学附属中学校）

○提案授業 世界史 A 「近代化と私たち」

筑波大学附属高等学校 1 年生生徒

授業者 五十嵐 学（筑波大学附属高等学校）

○パネルディスカッション

「歴史的な見方・考え方をどう育てるか 歴史総合の発足を見据えて」

コーディネータ 梅澤 真一（筑波大学附属小学校）

パネラー 粕谷 昌良（筑波大学附属小学校）

パネラー 関谷 文宏（筑波大学附属中学校）

パネラー 五十嵐 学（筑波大学附属高等学校）

コメンテーター 伊藤 純郎（筑波大学）

○講演

「これからの歴史教育への提言」 講演者 伊藤 純郎（筑波大学）

通算で 5 回目になる第 3 回筑波小中高連携社会科授業研究会では、会場を初めて附属中学校・高等学校の会場で行った。そのことによるメリットは、中学生や高校生が研究会に参加しやすいこと、今まで小学校が会場を用意して研究会の企画運営を中心に担ってきたが、会場の確保は中学校、高等学校の社会科部員が担うため、より、運営に主体的に取り組める体制ができるようになった。研究会運営のための仕事分担が小中高で均等になった点も大きい。

中学校、高校の教員も担当する学級の授業を公開することで負担が増すが、提案する楽しみも増えた。研究会に参加する教員に、中学校、高等学校の教員が増えたのもこの会からである。中学校、高等学校の研究会では、実践報告会は多々あるが、授業を公開する研究会はさほど多くない。貴重な取り組みである。

提案内容も、高等学校で新設される「歴史総合」を提案したので、全国で歴史を担っている高校の教員の興味関心を誘った。

小中高校の授業を通して、「歴史的な見方・考え方」をどのように育てるのかを考えるパネルディスカッションや大学で歴史教育を専門とする大学教員の講演を位置づけたことも、テーマを考える上で有意義な研究会になった。

(3)【第4回筑波小中高大連携社会科授業研究大会】

通算で6回目の連携研究会となる第4回筑波小中高大連携社会科授業研究大会は、2018年1月13日（土）に実施した。会場は前回と同様筑波大学附属中学校・高等学校 桐陰会館で行った。研究会テーマと内容は次の通りである。

○テーマ 小中高の社会科教育の一貫性を考えるー「思考力・判断力・表現力」育成の系統性を探るー

○提案授業 「わたしたちの東京都」 筑波大学附属小学校 4年生

授業者 山下 真一（筑波大学附属小学校）

○提案授業 「対立から合意へ」 筑波大学附属中学校 2年生

授業者 升野 伸子（筑波大学附属中学校）

○提案授業 「他者とどう向き合うかー援助を考えるー」

筑波大学附属高等学校 2年生

授業者 福元 千鶴（筑波大学附属高等学校）

○授業後の協議会

授業者 山下 真一（筑波大学附属小学校）

授業者 升野 伸子（筑波大学附属中学校）

授業者 福元 千鶴（筑波大学附属高等学校）

司会者 粕谷 昌良（筑波大学附属小学校）

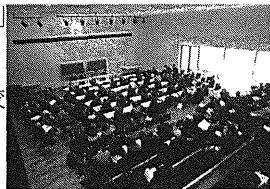
○講演 『「思考力・判断力・表現力」の育成とその系統性』

講演者 井田 仁康（筑波大学）

授業後のパネルディスカッションは授業提案者がパネラーとなり、小中高で育てる「思考力・判断力・表現力」について意見交換をした。提案授業で見られた子どもの姿をエビデンスとして語ることができたので、説得力のある話し合いができた。小中高の授業を続けて3本続けて参観することにより、「思考力・判断力・表現力」の成長の様子を見て取れる。○○力のような場合は、小中高の連携の視点で見ると、系統性や発展性の視点で捉えることができる。講演も小中高の授業についてのコメントも加わり、参加者や授業者にとって価値あるものとなった。

(4)【第5回筑波小中高大連携社会科授業研究大会】

通算で7回目の連携研究会となる第5回筑波小中高大連携社会科授業研究大会は、2019年1月19日（土）実施された。会場は前回と同様筑波大学附属中学校・高等学校の桐陰会館で行った。研究会テーマと内容は次の通りである。



○テーマ 小中高の社会科教育の一貫性を考える—新学習指導要領における「資質・能力」育成に焦点をあてて—

○提案授業 「わたしたちのまちのうつりかわり」筑波大学附属小学校 3 年生

授業者 由井 蘭 健（筑波大学附属小学校）

○提案授業 『日本の諸地域「中国地方」—人口や都市、村落を中核として—』

筑波大学附属中学校 1 年生

授業者 山口 泰宏（筑波大学附属中学校）

○提案授業 『歴史総合「歴史の扉」を見据えて』筑波大学附属高等学校 2 年生

授業者 大庭 大輝（筑波大学附属高等学校）

○授業後の協議会

授業者 由井 蘭 健（筑波大学附属小学校）

授業者 山口 泰宏（筑波大学附属中学校）

授業者 大庭 大輝（筑波大学附属高等学校）

司会者 山下 真一（筑波大学附属小学校）

○講演 「隣国の歴史をいかに考え、教えるのか」

講演者 國分 麻里（筑波大学）

授業後のパネルディスカッションは授業提案者がパネラーとなり、小中高で育てる「資質・能力」について意見交換をした。提案授業を行っているので、授業で見られた子どもの姿をエビデンスとして語ることができ、説得力のある話し合いができた。小中高の授業を続けて 3 本参観することの大切さを痛感した。また、参観者のアンケートでは、小中高の 3 つの授業があることにより、自分とは違う種類の学校の授業の様子が理解でき、小中高の連携の課題やめざす方向節を考える機会になったなど、大変好評であった。また、授業者は準備が大変ではあったが、授業提案をする機会が小中高均等にあることで、小中高のそれぞれの教員が研究会に主体的に取り組むことができるという成果も見られた。

5. 最新 2020 年実施の筑波小中高大連携社会科授業研究会

(1) 第 6 回筑波小中高大連携社会科授業研究大会の概要

通算で 8 回目にあたる直近の第 6 回筑波小中高大連携社会科授業研究会は、2020 年 1 月 18 日（土）に実施した。主な内容は、次の通りである。

○テーマ 小・中・高の社会科教育の一貫性を考える - 「深い学び」を生み出す

授業づくりに焦点をあててー

○提案授業 「地域の人々が大切にしているもの」 筑波大学附属小学校 2 年生

授業者 梅澤 真一（筑波大学附属小学校）

○提案授業 「明治維新と近代国家の形成」 筑波大学附属中学校 2 年生

授業者 山形 友広（筑波大学附属中学校）

○提案授業 「地理総合『持続可能な地域づくりと私たち』を見据えて」

筑波大学附属高等学校 1 年生

授業者 中村 光貴（筑波大学附属高等学校）

○パネルディスカッション 「深い学び」を生み出す授業をどうつくるか

○コーディネータ 五十 嵐学（筑波大学附属高等学校）

○パネラー 梅澤 真一（筑波大学附属小学校）

○パネラー 山形 友宏（筑波大学附属中学校）

○パネラー 中村 光貴（筑波大学附属高等学校）

○コメンテーター 井田 仁康（筑波大学）

(2) 小学校の提案授業の詳細

①単元名 「地域の人々が大切にしているもの」

②単元のねらい

○縛られ地蔵は江戸時代から地域の人々に信仰され続けているお地蔵であることを理解する。

○他の人の判断を踏まえ、縛られ地蔵にお願いすると願いがかなうか否か価値判断する。

○お地蔵さんの存在価値を理解する。

③指導計画（3 時間）

第 1 次 学校の周りの探検 茗荷谷駅の向こうに行こう…………… 2 時間

●縛られ地蔵の見学と聞き取り調査…………… (2)

第 2 次 縛られ地蔵について考える…………… 1 時間

●縛られ地蔵の言い伝え、ご利益について考える…………… (1)

④本時の指導（3 / 3 時間目）

(1) ねらい：縛られ地蔵にお願いすると、失くしたものが出てくるのか否か価値判断する話し合いを通して、縛られ地蔵の社会的価値について考える。

(2) 展開

主な学習活動と内容	価値判断力を育成する手立て
<p>1 縛られ地蔵の見学を想起する。</p> <p>○見学絵日記をもとに次のことを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・縛られ地蔵の姿 ・縛られ地蔵についてお寺の方から聴いたこと ・縛られ地蔵について自分で調べたこと <p>2 問題について意見を述べあう</p>	<p>○共通の体験で学んだことを考えたことをまとめた絵日記をもとに発表させる。</p> <p>○縛られ地蔵のいわれを確認する。</p>
<p>縛られ地蔵にお願いをすると、なくなったものが出てくるだろうか。</p> <p>○自分の考えをワークシートに書く。</p> <p>○お願いするとなくなったものが、見つかる、見つからない、の2つの対称軸の直線上に、自分の考えを相対的位置で示す。</p> <p>・自分の考えをマグネットで黒板上に示す。</p> <p>見つかる (かなう) ←→ 見つからない (なおらない)</p> <p>○理由を述べる</p> <p>【見つかる・願いが叶う】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・縛られ地蔵さんは縄がたくさん縛られていた。 ・人気があるのだと思う。 ・昔から400年もあるのだから願いが叶うはず。 <p>【見つからない・願いはかなわない】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ただの石造の彫刻だから、見つからないと思う。 ・お願いしてすぐに見つかるのならば、こんな楽なことはない。 ・縛られ地蔵さんは縄がたくさん縛られていた。 ・きっとおがんでも見つからない人が多くいるからだ。 <p>3 違う考えの子に質問する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昔から大事にされている。屋根やお花もあった。 ・かなわないなら、400年近く縛られ地蔵様があるわけがない。 ・石の像は飯の形で、本当は今の世と違うところにいるのでは。 <p>4 みんなの疑問について話し合う</p>	<p>○縛られ地蔵に縄を縛って拝むとなくなったものが出てくると思うか否か個々の価値判断を表明させる。その際に、理由を述べさせる。</p> <p>○他と自分の価値判断を比べ、自分と違う価値判断をした児童に質問をさせ、価値観の違いの根拠を確認させる。</p>
<p>本当に見つかるかわからない、縛られ地蔵が、なぜ、400年も大切にされてきたのだろうか。</p> <p>○隣の人と少人数で話し合う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見つかった人がいるからじゃないかな ・大切なものをなくした人にとっては大切な存在、心の支えになるのでは。 ・今僕には、必要ないけど、大切なものをなくした時には、縄を縛ってお願いしてみたい。 ・昔から人々が縛られ地蔵を大切にしてきたのは、求める人がいるからだと思う。 <p>5 今日の学習で考えたことをノートにまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おがんだだけでは失くしたものは見つからないけど、おがむことによって、見つけよう、気を付けようという気持ちが強くなる。そのことで、失くしたものが見つかることもあるのではないかな。 ・ほんとに大切なものをなくしてしまった人にとっては大切な存在だと思う。 ・警察に頼んでも出てこない場合は、拝むしかないと思う。だから、縛られ地蔵さんは価値があると思う。 ・昔から地域の人が大切にしているから、私も大切にしたい。 	<p>○自分の価値観をもとに判断してきたが、ここでは、自分とは違う他者にとって、「縛られ地蔵」はどんな価値があるのか、立場の違う人たちのことも考えさせたい。話し合いで、「なくしものをして本当に困っている人にとって」など、他者について考えられない場合は、教師が、誰にとって価値があるのか考えるよう助言する。</p>

(3) 中学校の提案授業の詳細（山形友宏指導案より抜粋）

①単元名「明治維新と近代国家の形成」

②単元のねらい

本単元は、中学校新学習指導要領 第2章第2節2 歴史的分野（2）内容「C 近現代の日本と世界（1）近代の日本と世界」におけるア（イ）明治維新と近代国家の形成 イ（ア）「政治や社会の変化，明治政府の諸改革の目的」に着目して「近代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し，表現」（解説 p.110）させることをねらいとして設定した。その際，（3）内容の取扱い「イ 様々な資料を活用し，歴史にかかわる事象について様々な情報を読みと」（解説 p.122）る作業をおこなうこととした。

③指導計画

	学習内容
第1時	学校の特別教室の歴史を予想したり，唱歌の成立の意図を考察することから明治以降の歴史を概観し，当時の本校の平面図を読み解く
第2時	各学校段階における時間割を予想したうえで明治以降の学校・教育課程を理解し，国民形成に資する学制を理解する
第3時	スポーツ選手等に見られる現代の「国民」意識を問いかけながら，国民国家の定義とそのようすについて理解する
第4時	国民国家の定義に適合する明治期の諸政策・事績を理解する
第5時	これまでの学習をふまえて，日本が国民国家になったのはいつか考察する
第6時 （本時）	世界の教科書からみた明治維新について，その記述を分析し，よりよい記述を考案する

④本時の指導

ア 目標：世界の教科書に見られる明治維新の記述の読み取りや比較・考察を通して，明治維新の事績を国際的な視野から理解するとともに，日本の教科書との記述の違いを通して，グローバル社会で生きる自分たちの時代の教科書記述のあり方について考察する。

イ 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点・方法
導入 (7分)	○ふりかえりシートを見ながら、前時の内容の復習を行い、明治維新への評価をする	○「日本が国民国家になったのはいつか」という問いに対し、国民国家の定義を再確認した上で、現代にいたる国民国家としての日本のあり方について考察させる ○欧米も国民国家としての存在が揺らいでいることにも触れる	○授業者の問いに積極的に答え、自らようとしている【主】
展開 (38分)	○明治維新を外国はどう評価しているか、外国と対応する教科書記述の内容を予想する ○5つの明治維新の記述のうち、どの記述がどの国の教科書のものか、話し合って予想する ○それぞれの記述を通して考察や感想を発表する ○各教科書記述のうち、修正が必要だと思われる箇所を探して訂正する。	○現在の日本との関係と教科書記述の対応関係や、明治維新についての評価も予想させる ○判断根拠となる部分に下線を引くなど工夫させ、また班で話し合って根拠を持って予想する ○特に中国・韓国の教科書記述については事前の書きぶりのイメージと異なることが予想されるので、両国の教科書記述に着目させる ○時間が足りなければ次回の授業までの課題とする	○予想や発表における根拠づけ【思】 ○班での話し合い、発表【主】 ○明治期の知識を応用した記述分析【知】
まとめ (5分)	○ふりかえりシートに自己評価、相互評価を行い、感想を記入する	○本日の授業について、意見や感想・提案などを記入し、近隣の生徒に授業への姿勢等について評価コメントをもらう ○退出時の注意事項や次時の連絡	○授業を踏まえ体験記述【思】 ○自己評価・相互評価【主】

⑤本時の評価

評価規準：世界の教科書における「明治維新」の記述を通して、思考力・判断力・表現力を高めている。

評価基準	
A	世界の教科書の明治維新の記述から、歴史的事象の扱われ方に差がある原因を追究し表現している
B	世界の教科書の明治維新の記述を通して、その書きぶりの違いに気づく
C	明治維新についての知識の定着が不十分であり、海外の教科書にも取り組めていない

(4) 高等学校の提案授業の詳細（中村光貴指導案より抜粋）

①単元名：

生活圏の諸課題の地理的考察 持続可能な地域づくり・地域の再開発を計画しよう

②単元の目標：

- ・地域を比較することを通して、生活圏に対する関心と意識を高め、諸課題の解決に意欲的な態度を身に付ける。
- ・取り扱う地域や、生活圏の諸課題について、多面的・多角的な考察を経て自分の言葉で説明できる。
- ・課題の解決に向けて、さまざまな資料から有用な情報を適切に選択し、活用することができる。
- ・課題の解決に向けての探究のプロセスを理解し、その方法を知識として身に付ける。

③単元の指導計画（11 時間＋冬休み）

- ・東京はどのような都市なのだろうか（外から見た東京と、東京の内側）（2 時間）
- ・冬休み課題「わたしが暮らす地域の再開発 2019」作成・プレゼンテーション
（冬休み＋1 時間）
- ・冬休み課題の事例地域と、附属高校のある文京区を比較してみよう。それぞれの自治体はどのような特徴があるだろうか。（1 時間）
- ・冬休み課題の事例をもとに、再開発を検証してみよう。【本時】（1 時間）
- ・再開発を行う「文京区 X 地区」と、その周辺における課題は何だろうか。
（1 時間）
- ・仮説をもとにフィールドワークや各種調査を通して、再開発プランを検討しよう。（3 時間）
- ・再開発プランのプレゼンテーション（2 時間）

④本時の計画

ア 本時の目標：

- ・再開発事例の検証を通して、地域どうしの結びつきや、持続可能な地域づくりなどについて理解することができる。
- ・それぞれの学習活動において、対話的な学びの中で推察や考察しながら、自分のことばで表現することができる。

イ 本時の展開案

学習活動	指導の留意点	資料・評価等
1. 前時までと本時以降の活動の確認をする。	前時までのプリント等を参照させる。 プリント No.30 を配布する。	パワーポイントを使用 【関心・意欲・態度】
2. 「再開発は誰のためのものなのか」を考える。 →適宜、グループ内で意見交換を行う。	机間指導をしながら、難しく考えてしまう生徒のために、具体的な事例を示す。 一般的共通性と地方的特殊性に触れる。 開発業者やプランナーは、ターゲットを設定することを、まとめとして伝える。	【思考・判断・表現】
3. 「再開発の目的は何か」を確認する。 →ポスター作成者が中心となって、グループで目的を読み込む。 場合によってはスマホ等を利用して更に調べる。	ポスターを確認させ、ポスター作成者に質問をしながら、再開発の目的を再度整理させる。 基本的には生徒の活動に任せる。	【思考・判断・表現】
4. 改めて事例とした再開発を評価する。 →まずは個人で考えをまとめる。 →次いでグループ内で意見交換を行う。 →いくつかのグループが評価内容について発表する。	学習活動 2・3 の成果をもとに、個人で評価をさせる。 グループ内意見交換は、ポスター作成者に司会をさせる。	【思考・判断・表現】
5. 再開発事例を SDGs に当てはめて考える。 →SDGs のキーワード（スローガン）を確認する。	冬休み課題でも SDGs について検討をさせているが、本時の学習を経て選ぶアイコンが変わることは問題ないことを伝える。 アイコン 11 のゴールとターゲットを解説し、本時の活動を再確認させる。	
6. 個人の振り返りを行う。	次時以降の予告を行う。 プリント・ポスターを回収する。	【知識・理解】

(5) 小中校がとらえる社会科における「深い学び」

授業提案の後、「深い学び」を生み出す授業をどうつくるか」についてのパネルディスカッションを行った。

文部省学習指導要領は2020年度から小学校から完全実施が始まり、順次、中学校、高等学校で実施される。新しい学習指導要領では、小中高において「深い学び」の実現が目指されている。そこで、本研究会では、「深い学び」を生み出す社会科授業づくりに焦点をあてディスカッションを行った。授業提案を通して、「深い学び」をどのようにとらえているのか、それを実現するのにどのような授業づくりが必要なのか協議した。

小学校では、梅澤が、「今求められている社会科における「基礎・基本」は何かと問われれば、変化が目まぐるしい社会においてこそ、社会の状況を的確にとらえ、人々が幸せになるための価値判断や意思決定をする能力こそ、社会科における「基礎・基本」だと答えたい。」とし、社会的な価値判断力や意思決定力を育てることが社会科の「深い学び」であると主張し、そのための授業づくりについて提案した。

中学校の山形は、「深い学びの実現のためには、『社会的な見方・考え方』を用いた考察、構想や、説明、議論等の学習活動が組み込まれた、課題を追究したり解決したりする活動が不可欠」であり、具体的には「諸資料等を基にした多面的・多角的な考察、社会にみられる課題の解決に向けた広い視野からの構想（選択・判断）、論理的な説明、合意形成や社会参画を視野に入れながらの議論」を通し、「社会的事象等の特色や意味・理論などを含めた社会の中で汎用的に使うことのできる概念等にかかわる知識を獲得するように学習を設計する」ことだと主張した。また、「社会的な見方・考え方」は、「社会的事象を時期、推移などに着目してとらえ、類似や差異などを明確にしたり事象同士を因果関係などで関連付けたりして」て働かせるものとの文部省学習指導要領の解説の趣旨に沿った内容の具現化を試みて授業づくりを提案した。

高等学校の中村は、「本単元を学ぶことを通じて、彼らの生活圏において地理的技能や、地理的な見方・考え方を働かせ、諸課題の解決に関与できるような存在になってもらいたいと考えている。」とし、授業において、再開発の姿を学習の最終目標におくことで、「何が地域の課題なのか」「何のための再開発なのか」「10年50年先まで持続可能な地域づくりとは何であるのか」といった問いが生

まれ、この問いを解決するために生徒は情報を収集し、その整理と吟味、分析などの探究のプロセスを踏んでいくことを期待していると主張した。

「深い学び」については、「主体的・対話的な」「社会的な見方や考え方を働かせる」など学習指導要領にその形態が示されている。

本研究会で提案された3つの授業の共通点は、どの授業も話し合いを取り入れていた点である。小学校では、「縛られ地蔵にお願いすると願いが叶うか否か」「どうして、願いが叶うか否かのわからない縛られ地蔵が300年も大切にされているのだろうか」という答えが明確にならない問題について話し合った。中学校では、明治維新についての教科書の記述を読み、どこの国の教科書であるかを推論する話し合いを行った。こちらは、授業の後半に正解を教師が知らせる授業である。高等学校では、地域の開発について持続可能な視点で、よい点と課題になる点をグループで話し合った。例えば、東葉高速鉄道の開発については、利便性の向上などの利点、開発費が高くなり運賃が他の鉄道に比べて著しく高い課題など話し合った。

どの授業においても、児童生徒が主体的に対話的に話し合いに参加している姿が見て取れた。

一方課題になった点は、社会科として何について話し合うことが深い学びになるかという点である。主体的、対話的な話し合いが実現したことは素晴らしい成果であるが、それは、あくまで方法論である。社会科での「深い学び」を考えたときに、何について話し合うことが、社会科の「深い学び」につながるのか、さらに検討が必要である。大人でも意見の分かれている社会問題を扱うのがよいのか吟味が必要である。また、小学校、中学校、高等学校、大学など発達段階にあった社会科で学ぶ内容についても、「深い学び」の視点で整理が必要になる。

Ⅳ. 筑波小中高大連携社会授業研究会設立から今日までにおける活動の成果と課題

これまでに各章で、本研究会の設立の経緯と最新の研究会の詳細な内容について記してきた。各章ごとに成果と課題をまとめたが、ここで、今までの経緯を振り返り、最終的な成果と課題をまとめる。

(1) 成果

小中高校の連携カリキュラム作成だけでなく、授業をお互いに見合う環境を整

えることで、小中高の社会科教育の連携をどのように図ればよいか見通しが持てた。授業実践家の集まりでは、授業を見ることが話し合いの共通の土俵になることを改めて確認した。

研究会創設期から、筑波大学人間系社会科教育学の先生方に大変お世話になった。本研究会の趣旨に賛同され、公務多忙の中で、本研究会の講師助言者を快く引き受けてくださった。最先端の社会科教育の情報を提供や、実践について意味づけをしていただいた。さらに、これからの社会科教育の方向性についてご示唆いただいた。

授業実践、授業公開を通して、小学校、中学校、高等学校、大学教員が本研究会の目的である「小学校から高等学校までの社会科教育の連携を考え、よりよい社会科授業の具現化を図ること」を目指すことで、附属学校教員、相互の連帯感が育まれた。

会の運営については、会を重ねるごと運営内容の分担が定着化効率化され、円滑な運営がなされるようになった。研究会参加者も毎年 150 人程度で定着し、毎回会場が満席になる盛況振りである。

(2) 課題

小中高の三校の教員が興味を持つ、解決したいテーマの設定が難しい。学習指導要領改訂時の課題や現場の教員が困っている内容、四校研究会の課題などを織り交ぜ、その都度価値あるテーマを設定していく必要がある。

授業を公開し提案したら終わりではなく、研究会の記録を丁寧にし、継続的な研究になるようにしていく必要がある。そのためには、数年単位で解決していくような先を見越したテーマ設定と研究会の記録実践の記録の積み重ね間が大切になる。

研究会開催時期は毎年 1 月中旬で実施しているが、この時期は大学のセンター試験と重なる。筑波大学の大学教員の都合もそうであるが、全国の大学教員、高等学校教員の都合も配慮し、センター試験日を避ける日程を設定する必要がある。そのことにより、毎年 150 名の参加者がもっと増えることが期待できる。

追記

4 校のそれぞれが各仕事を抱える中で、プラスアルファの仕事を企画実施するのは難しい。まず、中心になる学校が研究会を開催し、実践報告を依頼する。

その後に、できる範囲で授業提案をしていく。毎年の行事に位置づけ、小中高の部員で担当を決めて授業を実践するようにする。そして、理論的なサポートを大学教員にお願いする。あればいいねと誰もが思う研究会は、まず、発起人が一歩を踏み出すことから進めることで実現する。言われれば、頼まれればやるけど、自分からすすんで企画準備は負担が大きすぎると考える教師は意外と多い。また、研究会ができれば、研究会に参加してくれる全国の教員がいる。遠方より駆けつけてくれる仲間がいる。全国の社会科教育を動かすのは「筑波小中高大連携社会授業研究会」だという自負と気合が研究会を継続させる。